

〈書評〉

川島 慶子 著

『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエ ——18世紀フランスのジェンダーと科学』

(東京大学出版会 2005年 249頁 ISBN4-13-060303-5 2,800円+税)

森 義仁



女性科学者のパイオニアとして誰もが思い出す人物はマリー・キュリーであろう。1903年にノーベル物理学賞を、1911年にはノーベル化学賞を受賞し、それらの研究業績は分子または原子の実在性証明に大きく貢献した。現代においては、物質の基本粒子を分子または原子とする考えを拒否する人は皆無と思われるが、19世紀後半においてさえ、まだその考えは仮説の域を出ていなかったのであり、20世紀前後になりはじめて、その実在性がブラウン運動を研究したペラン、電子を発見したトムソン、そして、原子の崩壊を研究したマリー・キュリーにより証明されたのである。そのマリー・キュリーを遡ること100年以上前、18世紀のフランスに、物理学と化学の分野において、二人の女性が大きな足跡を残していることを知る機会は科学者でさえも多くないと思われる。その二人の女性の名前は、物理学分野で活躍したエミリー・デュ・シャトレと化学分野のマリー・ラヴワジエ、これら二人の女性について膨大な資料をもとにその生涯を描き、彼女たちの言動を通じて、当時の科学世界に潜むジェンダーの非対称性に光を当てたのが、川島慶子氏による本書『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエ』である。そして本書の特徴は、二人の女性と当時の男性科学者集団との関係を焦点にして、彼女たちの言動の根源を、当時の科学世界に潜むジェンダーの非対称性に求めているところにある。

本書は全5章から構成されており、第1章「科学革命の時代から啓蒙の時代へ」、第2章「ふたりの才女とふたつの時代」において、18世紀当時の思想的背景と科学活動を取り囲む状況と、そこに置かれた女性の立場について述べ、本書の主張の基準となる著者の視点を展開している。続く、第3章「エミリー・デュ・シャトレと『物理学教程』」及び第4章「マリー・アンヌ・ラヴワジエと二つの革命」において述べる二女性の詳細な言動を、先に示した視点から、ジェンダーの非対称性を明らかにするのである。そして、終章「ジェンダーの視点から見えてくるもの」においては、本書が、過去の出来事に関する一つの解釈ではなく、本書で展開された、隠された真実へのアプローチが現代でもなお有効であることへ筆を進めるのである。

本書を読むとき、まず、なぜ18世紀という時代が取り上げられているのかに興味を持たれる。その話題となる二人の女性、エミリーは18世紀前半を、マリーは後半を生きただけであるが、その時代はちょうどロココの時代でもある。ロココの時代は、教会の権威が衰退し、人間の理性が台頭する、その境目の時期にあたる。ホイジンガーによると、遊びと真面目が最も接近した時代であると言われ、また女性と男性が共通の感情を持ち、小さなものへの愛が強調された時期である。例えば、ロココの王と呼ばれ

たルイ15世が珈琲を入れることを好んだり、プロシア王のフリードリッヒが編物を得意としたり、ポーランド王スタニスワフが凝ったお菓子作りからマドレーヌが生れたりしたことは有名な話である。このようなロココの時代には、筋が通った理屈より行動美学が重んじられる傾向があり、特に既婚女性が自由をとて得やすい環境があり、女性が科学活動をし、それが表に出てくる結果となったのである。既婚女性には自由があると言ってももちろん特権階級に限られたものであり、すべての女性に与えられたものではない。それでもなおジェンダーの非対称性がまったくないということはなく、理性の台頭はあくまで男性によるものであることを忘れてはならないと本書は述べているのである。それまでは女性の言動が表に現れなかったので、ジェンダーの非対称性が顕著にならなかっただけであり、このロココの時代にあって、比較的、女性の言動が表に出ることが可能となったがゆえに、ジェンダーの非対称性が浮き彫りにされたと、本書を理解することができる。ロココの時代が終わると、男子専制の時代が到来し、科学の分野からは女性が、すくなくとも表舞台から姿を消すことになり、ジェンダーの非対称性さえ見えなくなるのである。従って、著者により18世紀という時代が選ばれていることは、ジェンダーの非対称性を浮き彫りする題材としては適したものであると言えるのではないだろうか。

次に、著者が話題の女性と彼女たちを取り囲む男性科学者集団との関係を、どのような視点から展開し、ジェンダーの非対称性をどのように発見しているのかが気になるところである。当時、男性科学者たちは自分たちの集団として王立科学アカデミーを組織しているものの、その集団は、科学者の研究と生活を十分に支援してくれるものではないものであり、科学活動を広く社会的に支援してもらう必要があった。その支援者として、貴婦人たちが選ばれたのである。もちろん貴婦人たちは、王立科学アカデミーのメンバーには決してなることはできず、あくまで観客であることを男性科学者は望んだのである。その一方で貴婦人たちは自分たちの自主的な活動を展開するためにサロンを作り対抗したのである。この当時のサロンには公の支配力が及ばないばかりか、貴婦人の豊かな経済力や広い人脈があり、その力は無視できるものではなかった。男性科学者はそのサロンで認められるためには、「礼儀や優雅さあるいはエスプリ」を身につけることが要求されるとともに貴婦人の目的実現に協力したのである。著者は、ここで、男性科学者が貴婦人を自らの科学活動支援者として利用し、その一方で貴婦人たちがまたサロン活動を通じて男性科学者を自分たちの目的実現のために利用した、つまり「共犯関係」が成立すると著者は主張するのである。その共犯関係が成立することこそを、ジェンダーの非対称性の存在の証拠として発見しているのである。男性科学者集団からみれば、女性は「語られるもの」であり、「語るもの」ではないことが、都合がよいわけで、女性のサロンで認められる努力はするが、あくまで支援者であることを望んでいる。しかしながら、エミリーとマリーはサロン活動を通じて「語るもの」であろうとするのである。エミリーは、世界ではじめての物理学の教科書を作成し、ニュートンの大著書「プリンキピア」を訳し、当時の科学研究上の問題についての論文をも発表し、一方、マリーは、論文集の序文を書き、挿絵を描き、論文集を編集するのである。ただ単にそれらの業績を書き並べるだけでなく、著者は、これらの女性の言動に関する資料をもとに、彼女たちの業績が成された経緯を詳細に記述し、そこに「共犯関係」の成立を確認するのである。

加えて、本書が主人公と彼女たちの夫との関係を通じて、当時のジェンダー非対称性を観察していることはとても興味深い。エミリーの夫、デュ・シャトレ侯爵フロラン・クロードは特に科学に関心がないうものの、妻の科学活動に自由を与え、エミリーが自主的に「語るもの」となろうとするには適した環境であった。一方、マリーの夫はフランス革命で命を落としたアントワーヌ・ローラン・ラブワジェ、

その後、再婚したラムフォード伯爵ベンジャミン・トムプソンであり、いずれも科学者である。ところが、アントワヌは妻の科学活動を積極的に応援する立場をとるが、後世に近代化学の父と称され、当時の権威であることは、マリーが自主的に「語るもの」となろうとすることには大きく影響する。ベンジャミンは新大陸から来たアメリカ人であり、妻が科学活動をするには賛成ではなく、結局、離婚する。その後マリーは自身のサロンを主催し、「語るもの」であろうとするのである。エミリーと比べ、マリーの場合、その素性を大きく異にする二人の夫との関係に、ジェンダー非対称性の存在をより明確に認めることができるのである。

最後に、本書終章で述べられているように、本書が単に過去のジェンダーの非対称性について書かれただけでなく、ここでのアプローチは現代でも有効であるという著者の主張について考えてみたい。本書は、著者が1990年代はじめから現在に至るまでに発表した数多くの論文が基礎となっており、また世界的にみても話題の二女性の生き様を綴った書のほとんどが男性による執筆であることを考慮すると、本書が稀少で貴重な著作であると言えることができる。現在、科学分野においてとみに女性科学者の育成が高く望まれる。これは依然としてジェンダーの非対称性が残る状況を如実に示しているものであり、本書が18世紀の出来事にとどまらず、今日、女性を取り囲む科学事情を考える上でも決して色褪せたものではないことが分かるであろう。特に終章において、本書の内容が、「二十一世紀の日本に生きるわれわれとどのように関わっているのだろうか」また「科学に関する現在進行形の問題にとっても『別の解釈』を提示するための有用なアプローチのひとつとなるであろう」と述べている。これを最近の科学分野における男女共同参画活動が非常に活発化していることに照らし合わせてみると何が言えるだろうか。男女共同参画活動をどのように進めるかを定めるために、ジェンダーの非対称性を明らかにすることが望まれている。確かに政府発行の白書等、多くの人々の努力により統計データは蓄積されてきた。しかし、個々の生き様が広くかつ詳細に知られているわけではない。統計データだけでは限界があり、それに加えて、個々の生き様の記録を通じて現在の科学分野におけるジェンダーの非対称性を明らかにすることが、次のステップの候補となる可能性を本書が示唆していると考えても間違いではないであろう。

(もり・よしひと／お茶の水女子大学理学部化学科助教授)